

大沼法竜著

聖訓

敬行寺發行

心光普照

心光普照

法龍



はし が き

人間に生れてきて何が一番幸福なのでしょう。どうしたのが、どうなったのが一番の仕合せなのでしょう。物心一如と申しますが、物があっても心が腑抜けでは役に立ちません。いくら賢くても物質に恵まれなければ幸福とはいえません。健全な精神を持ち、健康な身体に恵まれ、豊かな物質を持ち、家庭円満なのが一番恵まれた幸福であります。それでも幸福を幸福と感謝する精神を恵まれていなければ貧乏人といわなければなりません。

豊太閤は草履取りから天下取りになり、物質には恵まれ過ぎて、天下を自由にいたしましたけれども、悪の限りを尽し、混乱に混乱を重ねた悪の集積ですから自分は亡魂に侵されて発狂状態で死亡し、二代目の秀頼は業火に包まれて大坂城と運命を共にし、誰ひとりとして尊敬する者もなければ、追善供養する人もなく、豊国廟は雨

晒では眞の幸福の人とはいえませんが。

一方精神的の大満足を与えられた、聖人さまは精神的には幸福の頂上であつたけれども、貧苦のどん底で一生を終られたのですから、人間としては眞の幸福とはいえませんが。精神的の満足と物質的の満足と両方面の満足を獲た人が人世無上の幸福者といえるのです。

聖人さまは人世の非常を悟り、眞の幸福を求められた方でありました。この世の物質は華やかで幸福に見えるようでも一瞬の間の楽しみで、愛欲も栄華も夢のように散り去るものであることに驚いて永遠の幸福を求められたのであります。あまり信仰が鋭すぎたから、周囲の僧侶は眞似が出来ず、九条家と婚姻を結んだのが羨望的であり、羨望は嫉妬となり、排他となり、遂には破門となり、流罪となり、この世では逆境苦悩のどん底に叩きこまれたけれども、我亦配所に越かずんば何によつてか辺鄙の群類を教化することが出来ようかと、怨みが転じて感謝ができるのは一重に威大な信

仰た賜物たまものでありました。

自分の逆境じぶんぎやくきょうは顧みかえりず、世よの中安穩なかあんゑんなれ仏法ぶつぽう弘ひろまれかしの尊とんとい信念しんねんは末代まつだいを照てらして
ますから、九十歳さいきちじゅうじゅうの長寿ちやうじゆを得えて、廿四代だいにも繁栄はんゑいし、末代まつだいの群類ぐんるいを教化きやうげしているではあ
りませんか。

人ひとは一代名だいなは末代まつだいと申もうしますが、物質ぶつしつの尊とんとさよりも精神せいしんの尊とんとさの方が勝すぐれています
けれども、世間せけんの人ひとはそうは思おもいません。出世しゆつせといえは物質ぶつしつに恵めぐまれて我儘わがまま放題ほうだいので
きる生活せいかつと思おもっていますけれども、それは世よに出でたことであり、真まことの出世しゆつせは世よを出でる
ことで、世よを超越ちやうえつすることであり、秀吉ひでよしは世よに出でた人ひとであり、聖人しやうじんは世よを出でた方かた
であります。

世よの中なかの人々ひとびとは何なにを一番望ばんのぞんでいますか。財産ざいさん・名譽めいよ・地位ちいを我利我利がりがりもうじやのよう
に望のぞんでいます、昔むかしの人ひとは偉まろいと思おもいます。金偏かねへんに者ものという旁つくりを書かいた字じも儲もつでは
ありません。名譽めいよの名なの字じの偏へんに者ものという旁つくりを書かいた字じも儲もつではありませ
ん。儲もつとい

う字は、信ずる者と書いてあります。

地位も名譽も財産も人間にはぜひ必要ではありませんが、線香花火の消えて、あとも空しい残月を眺めながら、後悔の涙に咽びながら老後を送らなければならぬ時がきますよ。心を弘誓の仏地に樹て情を難思の法海に流すといひまして、信仰の大満足を得て、仏心（仏さまのお心と）と凡心（私の心と）とが一体になって、感謝の日暮しをするものほど尊い生活はありませんよ。

人間が物質を希い願うのには必死になり、寢食を忘れて貪り求めておりますが、あの真剣さで道を求め宗教を聞かしていただいたら一生涯どれほどの幸福が獲らるるでしょうか。永久に枯れない、衰えない、萎れない心の華を開いたなら、世の中がどれほど清らかな、和やかな、平和な世界になるでしょう。

昔、永平寺の管長森田悟有禪師が東上される時、車中、一代の富豪平沼専三氏と乗合い、越後から江戸に乗出した時は、赤貧洗うがごとく、今は漸く富豪の列に加わつ

たと、立志伝めいた物語を聞いて、傍の従者に、今の話を聞いたか。はい財産を獲るためには寢食を忘れて生命懸で努力されたのですね。何をいつてるか、焼けば灰になり、埋たら土になる、流れもすれば盗られもする物質を得るために、あんなに必死になるのだから、色もなければ形もない精神的の満足を得るためには必死にならねば、永遠の生命は得られない、信仰が徹底することはできないのだぞと教示されたそうですが、あなたは本当に満足を得ましたか。人間世界では物質があればあるほどまだ不足なのが物質です。お経には有無同然と申しまして、あってもなくても同様だと教えてあります。あればあって大きな仕事をするから足りない、無ければなくて不自由で苦しむ、物質は差別的で有限・有碍であります、精神的大満足を得れば神通自在・無碍自在・無限絶対で、一切の有碍に障りなく、一切を楽しみ、すべてを拝み感謝ができるのであります。

宗教もただ一応聞いて合点したのを信仰と思ひ、真髓を諦得しようとして実地に求道す

る者が殆んど稀なものです。我こそは一流の極意を体験していると自惚れていない者は一人もいないのです。自分は体験していない、よい加減な信仰だと思ふ者は講演もできなければ著書も発表されないので。自分免許で自惚れているだけで晴れた名師がないから、必死の求道者も出て来ないので。あれだけ釈尊や終南や聖人が難中の難、極難の信と教えられても、実地の求道をする者がいないのですから開発した者が一人もいないのです。

小倉の田舎の婦人が、八幡の先生の処に参詣さしてくださいと主人に頼んだら、吃りの主人が、お前は何時も八幡、八幡と言って参、参るが、無理に無理に八幡に参らんでも、ここ、ここで参れ、お前、お前は、や、八幡に参ろうと思ふ時は、仕、仕事振りが違うわい、し仕方はない参れ。主人がある時景気よく、い行くぞ行くぞ。何処へ行きますか。東、東京から日本一の浪華節が小、小倉に来た。帰って来てから、面、面白かったぞう。何をやりましたか。浅野内匠頭が、松、松の廊下で、吉、吉良

待て。いくらとられましたか。一等が千両、一杯飲らんだ又千両。そんな高い処に行きなさんな、それより隣の正ちゃんの浪華節の方が面白いでしょうが。馬鹿、馬鹿あんなものが聞かれるか。何時も聞いているではありませんか。それ、それは日本一の来ない時の話。明日は行かないでしょう。馬、馬鹿明日は義士の討入りじゃ、おれが行かにはや浪華節にならない。かん、考えてみよ、東、東京に行かねば、き、聞かれないのぞ、往、往復の旅費、宿、宿賃、土産、莫、莫大な費用がいる、それに、先、先方から来てくれているのだぞ、俺、俺は一生に一度これを聞こうと思つて日頃一生懸命に働いているのだぞ。正ちゃんの語っている義士の討入りも筋道は一寸も變つてはいないではありませんか。そ、その違い目が判らないとは、お、お前達は情ないなあ、そ、そこにそこが有るから人がお、押掛けて大入満員じゃぞ。お父さん浪華節でもそこにそこが有るでしょう。おおあるともあるとも。同じ唯々と説教されても普通の布教使さんの只と先生の唯とは、そこにそこがあるから私は参詣したいの

ですよ。おわかかったわかった、まま、参れ参れといったさうですよ。

同じ唯でも話の只と体験の唯とは雲泥の差があり、書物を読んで合点した只と実地に求道して、すべてが尽きて無条件で摂取された時の大慶喜の唯とは天地の相違がありますから、よく念を入れてお聞きなさいよ。

このたびの書物は人さまから依頼を受けて額や軸物を書きました、その法味を書かして頂きました。下手な文章ではありますが、なるべく専門語を使用しないようにして、日々の生活の上に仏法を生かして来ようと努力しているのでございます。ご笑覧を願った上からは必らず有縁の方々に読んで頂いて、波紋の拡大するように仏法弘まればかと念じています。